修士論文（要旨）
2015 年 1 月

非行臨床における描画法のこれまでとこれから
－ 新しい描画法としての「楕円彩色法」の検討 －

指導　森　和代　教授

心理学研究科
健康心理学専攻
212J4056
本間　なぎさ

目　次

第１章　本研究の背景と目的
1.1　はじめに ・・1
1.2　楕円彩色法とは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.2.1　着想の背景・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.2.2　楕円彩色法の実施方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
1.2.3　類似の描画法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1.3　本研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第２章　研究１「非行臨床における描画法研究の歴史と今後の展望」
2.1　問題　・・・5
2.2　目的　・・・6
2.3　方法　・・・6
2.3.1　文献収集の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2.3.2　分析方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2.4　結果と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2.4.1　年代別にみる文献数と少年非行の推移　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2.4.2　年代別にみる研究の動向　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
2.5　今後の展望と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
2.5.1　非行臨床における描画「療法」研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
2.5.2　さまざまな現場での「非行臨床における描画法」研究・・・・・・・・・・・・・・15

第３章　研究２「楕円彩色法の有効性に関する実証的研究」
3.1　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
3.2　目的　・・・16
3.3　方法　・・・17
3.3.1　対象　・・17
3.3.2　期間・・・17
3.3.3　調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
3.3.4　実験の手続き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
3.3.5　倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
3.4　結果・・20
3.4.1　描画体験の強さについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
3.4.2　気持ちや感情および思考の表現と伝達について・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
3.4.3　過去の出来事の想起に関する項目について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
3.4.4　自由記述による感想について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3.5　考察・・24
3.5.1　描画体験の強さについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3.5.2　気持ちや感情および思考の表現と伝達について・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

3.5.3　過去の出来事の想起に関する項目について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
3.5.4　自由記述による感想について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
3.5.5　研究方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
3.6　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第４章　研究３「楕円彩色法の有用性についての事例研究」
4.1　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
4.2　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
4.3　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
4.3.1　対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
4.3.2　期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
4.3.3　模擬面接の手続き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
4.3.4　倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
4.4　事例と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
4.4.1　事例１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
4.4.2　事例２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
4.4.3　事例３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
4.5　総合考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
4.5.1　「過去の出来事そのもの」をあつかう描画法・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
4.5.2　直面化に伴う苦痛の軽減・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
4.5.3　対象者の自己理解の促進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
4.6　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

第５章　全体的考察とまとめ
5.1　本研究で得られた結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
5.2　治療者にとっての「楕円彩色法」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
5.3　実施にあたっての留意点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
5.4　今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

謝辞
参考文献
資料

1　本研究の背景と目的

1.1　はじめに

「楕円彩色法」とは，筆者が非行臨床に従事する中で独自に着想した描画法である。非行少年の多くは，自分の感情を自らの内に抱えておくことや，それらをことばにして表出し伝達することを苦手としている（平川，2000；藤川，2010）。そのため，彼らはうまくことばで表出できない情動を，ときに「問題行動」という形で表出してしまうのである。そのような傾向をもつ子どもたちとの面接では，一般の心理療法やカウンセリングで期待されるような内省が深まりにくく（河野，2003），面接が展開せずに現実場面での問題行動に歯止めがかからないといった事態が起こりがちである。ゆえに，非行少年との面接では，彼らが自分の内に湧き起こるさまざまな感情に気づき，それを理解した上で，問題行動という形ではなくことばで表出していく力をどのように育てていくかということが，一つの大きな課題となっている。

筆者はこの課題に取り組むなかで，彼らが起こした問題行動と，その行動に付随する感情や思考を視覚化し外在化する試みとして，「頭の中」に見立てた楕円図形に彩色を施すことにより自分の感情や思考を表現する方法を着想し，この方法を「楕円彩色法」と名付けた。筆者がこの技法を着想し，対象者との面接に導入した経緯や，この技法を用いたことによる治療的な意義については，先に一事例を取り上げて報告した（本間・森，2014）。

1.2　本研究の目的

本研究の目的は，描画法としての楕円彩色法の有効性を明らかにすることである。心理療法やカウンセリングの場において，楕円彩色法を用いて過去の出来事を振り返ることが対象者にとってどのような意味を持ち，どのような体験となっているのかについて，実証的研究と事例研究により検討し，心理療法に楕円彩色法を導入することの意義について検討することを目的とする。また，それらの研究に先立って，非行臨床において描画法がどのように用いられ研究されてきたかを概観し，今後の非行臨床における描画法の課題についても展望することとする。

2　本研究で得られた結果

2.1　研究１「非行臨床における描画法研究の歴史と今後の展望」

研究１では，非行臨床における描画法の歴史について概観するとともに，今後について展望した。非行臨床の現場では，日本に描画法が紹介された当初からこれを積極的に導入してきた経過がある。その歴史をひも解いてみると，1960 年代より描画法が導入・研究されるようになり，1980 年代に研究が本格化した。そして非行少年の増加もあって 1990 年代には研究の隆盛を迎え，文献数も最多となった。研究内容を見てみると，当初は描画テストの導入に伴い，より信頼性の高い指標を導き出すための量的研究が中心であった。その後，描画法はテストとしてだけでなく治療的な活用もされるようになり現在に至っている。今後の発展のために必要なこととしては，描画療法における非行少年特有の表現についての検討や，非行少年に特化した介入的な活用法，新たな技法の検討が挙げられる。その際，従来のような症例研究の手法による検討だけでなく，複数事例の横断的研究や基礎的研究などの手法を用い，より実証的な結果を導き出す必要があると考えられた。

2.2　研究２「楕円彩色法の有効性に関する実証的研究」

研究２では，筆者が非行臨床に従事する中で着想した描画法である楕円彩色法について，実証的な研究を行った。対象者を実験群と統制群に分け，実験群には楕円彩色法を，統制群には別の方法を導入した模擬面接を行い，「描画体験の強さ」や「感情や思考の表現と伝達」などに差異があるかどうか，

尺度を用いて比較検討した。その結果,「描画体験の強さ」,「感情や思考の表現と伝達」のいずれにも,両群間での有意差は見られなかった。しかし，項目ごとの比較検討では一部に有意差が見られ，その結果として自己理解の中でも「自分の好きなもの・興味・関心」といった感覚的な側面における自己理解をより促進させる効果があることが示唆された。また，まず色彩のイメージにより自分の感情や思考を表現することにより，漠然とした感情や思考をより言語化しやすくすることも示された。さらに，楕円彩色法を用いた面接を体験した多くの対象者が自己理解が進んだと感じ，実験後にはポジティブな感想を抱いており，このことからも楕円彩色法には新たな描画法としての有用性があることが明らかとなった。

2.3　研究３「楕円彩色法の有用性についての事例研究」

最後に，模擬面接で楕円彩色法を実施した３事例をとり上げ，事例研究を行った。事例１では，楕円彩色法による描画に表現された「黒」の領域の大きさや意味合いの変化から，対象者が問題行動に歯止めをかけることができた要因を読みとることができた。事例２では，肉親の死別に伴う悲しみとそこから立ち直る過程を振り返ったが，悲しみを表す青系の色彩を，感謝や尊敬の念を表すだいだいが次第に包みこんでいくことで喪のプロセスが進んでいく様子が見事に描画に表現された。事例３では，対象者にとって「自分が生きてきた中では大きなこと」となっていた出来事を楕円彩色法により振り返るなかで，対象者自らが，なぜこの出来事が「大きなこと」となっていたのかについての気づきを得た。そして，これら３事例の検討を通して，楕円彩色法には出来事そのものを描画であつかうことができ，ネガティブな出来事や感情と直面化する際の苦痛を軽減するとともに，対象者の自己理解が促進される効果があることが示唆された。

３　今後の課題

楕円彩色法は筆者が現場での実践において着想した技法であり，その研究も現場における面接への導入も始まったばかりである。今後，この技法が広くさまざまな対人援助の現場で活用されるようになるためには，次のような課題があると考えられる。

まず一つめの課題は，実証的研究における研究方法の問題である。これは楕円彩色法だけでなく他の描画法の研究においても共通する課題であるが，特に描画療法の研究は症例研究が中心であり，実証的研究の数は少ない。本研究でも実証的研究を行ったが，はっきりとした有効性を示すには至らなかった。楕円彩色法など描画を用いた治療法や介入法の効果を実証的に明らかにするためには，統制のかけ方や使用する尺度など，実験方法について検討する必要があると考えられる。

また，楕円彩色法によって描かれた描画の表現内容に関する検討も不足している。今回の研究では，描画の内容については事例研究で少し触れたものの，多くの人に共通する表現や特徴的な表現についての検討は行っていない。楕円彩色法によって描かれた描画を読み解くためには，それぞれの色が一般的には何を表すのかといった色の象徴についてや，色の塗り方，楕円形という枠内の空間の区切り方などについての一定の指標が必要である。今後は，そのような指標を得るために，楕円彩色法による描画の表現内容についても研究を進めていくことが求められる。

さらに，楕円彩色法が治療者にとってどのような効果をもたらすのかについても検討が必要である。本研究では，楕円彩色法を導入することが対象者にとってどのように有効であるのかを検討した。しかし，楕円彩色法は治療者と対象者の共同作業により描画をしていく技法であり，対象者だけでなく治療者にとってもさまざまな作用をもたらす。楕円彩色法が治療者にとってどのような効果をもたらすのかについても，今後研究を進めていく必要があるだろう。

参考文献

馬場史津（2005）．母子画の基礎的・臨床的研究　北大路書房　2-8.

藤掛明(1988)．非行少年の貼り絵の分析－点描方法における裏面貼りと重ね貼りについて－　臨床描画研究 Ⅲ, 160-174.

藤掛明（1995）．家族画における介入的アプローチ－１枚の家族画を前にして，次に何をするのか－　臨床描画研究　X，86-103.

藤掛明(1996)．コラージュ技法と非行臨床　犯罪と非行　110, 128-146.

藤掛明(1999)．非行臨床におけるコラージュ療法　現代のエスプリ　386, 219-227.

藤掛明(2006)．　非行少年に対する描画療法　現代のエスプリ 462, 189-197.

藤川洋子(2010)．なぜ芸術療法か－非行少年と風景構成法－　日本芸術療法学会誌　41(1)，40-47.

深田尚彦(1980)．描画心理学の体系　同志社女子大学学術研究年報　31(3), 295-309.

福岡聖二(1997)．少年鑑別所における4コマ漫画の特徴と心理過程　臨床描画研究　Ⅻ, 33-47.

波多腰正隆・山上栄子・中井久夫(1992)．貼り絵による風景構成法についての研究－非行少年，慢性分裂病者，献上青少年を比較して－　日本芸術療法学会誌　23(1), 24-33.

平川義親(1993)．シンナー吸引少年の特徴について－統合型 HTP テストに示される棒人間(stick figure)を通して見た一考察　臨床描画研究　Ⅷ, 213-223.

平川義親・尾崎敏子・芦澤政子・坂野剛崇(1997)．統合型 HTP 法を通しての非行少年の理解－少年事件調査実務への「統合型 HTP 法」導入の試み　調研紀要　67, 69-107.

平川義親(1999)．描画テストを通じてみた最近の非行少年と家族　ケース研究　261, 137-145.

平川義親(2000)．非行少年の理解と援助の手がかり　現代のエスプリ　390, 81-90.

廣井亮一(1989)．非行臨床における家族療法と家族画　臨床描画研究　Ⅳ, 146-162.

廣井亮一(1991)．描画療法としての間取り図の活用　臨床描画研究　Ⅵ, 143-163.

廣井亮一(1995)．間取図　臨床描画研究　X，45-62.

本間なぎさ・森和代（2014）．新しい描画療法としての「楕円彩色法」の検討-ある非行少年の事例を通して-　桜美林大学心理学研究（健康心理学専攻・臨床心理学専攻）　4，111-122.

法務省(2011)．少年・若年犯罪者の実体と再犯防止　平成 23 年版犯罪白書　40-73.

法務省(2013)．少年非行の動向と非行少年の処遇　平成 25 年版犯罪白書　22-28.

市井真知子(1999)．コラージュ技法の実際　刑政　110(4)，56-64.

一谷彊・西川満(1983)．バウムテストから見た中学生の非行と登校拒否　京都教育大學紀要　A，人文・社会　63, 1-23.

一谷彊・西川満・林勝造(1984)．バウムテストから見た中学生の非行と登校拒否　京都教育大學紀要　A，人文・社会　64, 1-22.

飯森眞喜雄（2000）．芸術療法の適応と注意点　こころの科学　92　芸術療法　日本評論社　24-30.

伊集院清一（2000）．描画法を用いた臨床についての展望　現代のエスプリ　390，35-46.

入江是清(1986)．非行少年の自画像と家族画　臨床描画研究　Ⅰ，150-168.

入江是清(1988)．非行と描画　臨床描画研究　Ⅲ, 53-79.

石川隆行（2010）．罪悪感の発達　心理学評論　53(1)，77-88.

岩井寛(1974)．芸術療法の発展と，その現況　精神医学　16(10), 6-18.

岩井寛・田久保栄治・金盛浦子・藤田雅子・五島しづ・森田孝子（1978）．マルと家族(1)－全体精神療

法の一技法ー　日本芸術療法学会誌　9，7-15.
岩本正男・澁澤敏雄・吉川昌範・河井猛・野村亜紀(1995). 風景構成法を通しての非行少年の理解ー少年事件調査実務への「風景構成法」導入の試みー　調研紀要 64, 72-97.
神奈川県警察少年相談・保護センター(2013).　社会情勢と少年非行の推移『ForからWithへー県民とともに歩んだ少年相談活動50年の足跡』3-24.（未刊行）
神田橋條治（1990）．精神療法面接のコツ　岩崎学術出版　227-255.
菅藤健一(1992). 人物が描かれていない「私の家族」についての一考察 臨床描画研究 Ⅶ, 184-199.
菅藤健一(2007). 非行少年の描画上の変化と適応上の変化との関連について 心理臨床学研究 25(2), 197-205.
菅藤健一・上埜高志(2010). 非行臨床における処遇経過分析の方法について 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58(2), 239-255.
加藤實（2004）．心理療法における「表現」とその意味に関する研究　岐阜聖徳学院大学紀要　教育学部編　43，73-93.
川端壮康・菅原正和(2010). 治療者に怒りを向けてくる非行少年との面接過程ー三角形の構図を維持するための工夫についてー　尚絅学院大学紀要 59, 1-10.
河合弘靖・徳永佳次・宇田康子(1994). 矯正施設におけるバウム・テストの活用について(1)ーバウム・テストを読むー　犯罪心理学研究 32(2), 35-49.
近藤孝司（2011）．描画法の描画過程と描画体験に関する一考察　中京大学心理学研究科・心理学部紀要 11（1），29-42.
河野荘子（2003）．非行の語りと心理療法　ナカニシヤ出版　39-50.
桑原尚佐(2004). 描画を中心とした心理査定の実際ー家庭裁判所の調査を中心にー　臨床描画研究 19, 23-38.
Lambert, M. J. (1992). Implications of outcome research for psychotherapy integration. In J. C. Norcross & M. R. Goldfriend(Eds.), *Handbook of psychotherapy integration*. New York: BAsic (Scott D. Miller, Barry L. DuncAn, Mark A. Hubble. ESCAPE FROM BABEL -Toward a Unifying Language for Psychotherapy Practice- 曽我昌祺監訳（1997）．バベルの塔から抜け出すために　心理療法・その基礎なるものー混迷から抜け出すための有効要因ー　金剛出版　30-41.）
松本真理子（1999）．子どもの描画療法における歴史と将来の展望　日米の文献的考察をふまえて　心理臨床学研究　17(2)，198-208.
三上直子・平川義親・尾崎敏子・芦澤政子・坂野剛崇(1998). 非行少年の統合型HTP法に関する発達的アプローチ 臨床描画研究 ⅩⅢ, 196-217.
宮西陵子(1994). 円枠家族描画法(F-C-C-D)の非行少年への適用 臨床描画研究 Ⅸ, 165-182.
宮田和佳(1998). 見取り図画の描画過程, 特徴とその効果ー少年事件調査での実施事例からー　臨床描画研究 ⅩⅢ, 218-239.
宮田和佳(2012). 非行臨床における処遇経過分析の方法について 臨床描画研究 27, 6-20.
森谷寛之(1988). 心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用 精神神経学雑誌(抄録集) 90(5), 450.
村瀬佳代子（1993）．治療技法としての描画　臨床描画研究　ⅩⅠ，23-43.
名島潤慈, 増田勝幸（1993）．バウム・テスト　心理アセスメントハンドブック　上里一郎（監修）　西村書店　223-238.

中井久夫(1970). 精神分裂病の精神療法における描画の使用―とくに技法の開発によって作られた知見について― 芸術療法 2, 77―90.
中井久夫(1974). シンポジウム３ 枠づけ法覚え書 精神神経学雑誌 78, 58―65.
中井久夫 (1977). ウィニコットのSquiggle 日本芸術療法学会誌 ８, 129－130.
中井久夫 (1982). 相互限界吟味法を加味したSquiggle (Winnicott) 法 日本芸術療法学会誌 13, 17－21.
中井久夫 (1983). 相互限界吟味法を加味したスクィッグル法 中井久夫著作集 ２ 岩崎学術出版社, 236-245.
中井久夫(1984). 風景構成法と私 山中康裕編 中井久夫著作集別巻 風景構成法 岩崎学術出版社, 261―271.
中村泰子(1998). ○△□法と居場所イメージ－3 事例の検討から－ 臨床描画研究 XⅢ, 240-260.
中植満美子 (2004). 子どもの描画と攻撃情動の継時的変化に関する研究 スクィグル・ゲームを通じて 心理臨床学研究 22(4), 381－393.
中里均(1978). 交互色彩分割法―その手技から精神医療における位置づけまで― 日本芸術療法学会誌 9, 17―24.
西村喜文(2006). 非行傾向生徒に対するグループ・コラージュの試み 心理臨床学研究 24(3), 269-279.
小此木圭吾 (1997). 対象喪失とモーニング・ワーク 松井豊編 悲嘆の心理 サイエンス社, 113-134.
奥田格・黒田健次(1994). 非行児における描画特性の分析 障害児教育実践研究 2, 43-53.
奥村晋(1986). 家族画の「うしろ姿」 臨床描画研究 Ⅰ, 187-200.
奥村晋(1987). 非行臨床における家族画 臨床描画研究 Ⅱ, 18-26.
貞木隆志・長屋正男・黒田聖一・下田裕子 (2000). 重度知的障害者の心理アセスメントにおける塗り絵課題の有用性 心理臨床学研究 18(4), 396-401.
坂野剛崇(2004). 少年保護事件調査面接における描画法の活用－面接関係における触媒としての描画 臨床描画研究 19, 148-162.
志水紀子・山﨑一馬(2001). 「間」の調節機能としての家族間交互色彩分割法－父母を復縁させようとしたＮ男－ 臨床描画研究 16, 144-155.
園部博範(1996). 描画表現を通した放火児童の理解と治療過程について 臨床描画研究 XI, 238-255.
杉浦京子(1990). コラージュ療法の試み 日本芸術療法学会誌 21(1), 38-45.
杉浦京子 (1994). コラージュ療法 基礎的研究と実際 川島書店
杉浦京子・香月菜々子・鋤柄のぞみ(2003). 投影描画法テストの動向と展望 日本芸術療法学会誌 34(1), 5-37.
高橋雅春・萱場徳子(1967). 精神分裂病を伴う非行少年に試みたHTPテスト 矯正医学 16(1), 19-23.
高橋依子 (2008). 描画法 現代のエスプリ別冊 投影法の現在 小川俊樹編 至文堂, 164-174.
武井明(2001). 盗癖を呈した男子高校生の描画法による治療過程－「ネコ」の表現をめぐって－ 日本芸術療法学会誌 32, 12-19.
田辺正友(1973). 非行児童における人物画の研究 奈良教育大学紀要 人文・社会科学 22(1), 179-184.
田中勝博 (1993). スクィグル法の実際 臨床描画研究 Ⅷ, 19-34.
田中勝博 (1995). 卵画と洞窟画－臨床描画における楕円枠空間の研究－ (第１報) 臨床描画研究 X, 151―168.
田中勝博(2001). 非行を対象としたスクウィグル 臨床精神医学 増刊号, 135-143.

田中勝博・今野裕之・小佐野綾（2003）．卵画と洞窟画の基礎研究（１）ー楕円枠線画刺激による描画促進に関する研究ー　目白大学人間社会学部紀要　３．77-96.
豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治（2005）．日本版ESCQ（Emotional Skills & Competence Questionnaire）の開発　奈良教育大学紀要　54（1），43-47.
土田恭史・田中勝博・今野裕之・丹明彦・赤坂香澄（2012）．描画体験の評価に関する尺度の作成の試み　目白大学心理学研究　8，23-3
運上司子・橘玲子・長谷川早苗・中村協子（2010）．風景構成法における彩色についての考察　新潟青陵大学大学院臨床心理学研究　４，19-23.
脇野満寿美(1988)．描画に表れる家族イメージ:非行少年と一般少年の家族画の比較を通して　障害児教育研究紀要　11，49-63.
山﨑一馬（2004）．言葉の添え木としての描画療法　臨床描画研究　19，79-94.